咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて③ 太平洋横断航海成功と将軍謁見

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

サンフランシスコ到着

咸臨丸は冬の季節風吹き荒れる太平洋北緯40度付近を東に進み、一ヶ月に渡る航海の末いよいよアメリカ大陸に近づいた。木村司令官の従者斉藤留蔵の日記には「三月十七日（＊太陽暦による）早暁薄曇り。南西風強く、波濤高く、午後に至り快晴美風となる。海面ようやく静か。」と記す。ここにきてやっと天気は安定した。ブルックは翌日の朝サンフランシスコの山を見るであろうと測量結果を出した。一方小野友五郎の測量はサンフランシスコの山を午後に見るとの計算だった。果たしてベテラン艦長ブルックの予想どうり、乗組員たちは翌十八日早暁サンフランシスコの山を見た。航海中はブルックよりも正確な測量値を算出することもあった小野・赤松組であったが、ここに至って小野の測量は二十里の誤差を生じ、ブルックに軍配があがった。

安政七年一月十九日（太陽暦1860年2月10日）浦賀を出航した咸臨丸は、嵐の中の三十八日間の航海の末、サンフランシスコに到着した。

礼砲

船酔いと不平で艦長室に閉じこもりきりであった勝麟太郎（海舟）は、ここにきて元気を取り戻し、乗組員たちとの間に悶着を起こす。入港の際、前檣には日章旗が掲げられていたが、勝は後檣に自分の旗を掲げようとする。海軍の国際ルールをオランダ特派艦スンビン号艦長ファビウス中佐から長崎海軍伝習所で学んだはずの勝であるが、それを無視した勝手な行動に乗組員らは勝の旗を隠してしまい、当然のことながら代将木村喜毅司令官の旗が掲げられた。サンフランシスコ港に停泊していた米軍艦から二十一発の礼砲が発射され、それに答えようと砲手が許可を求めると、勝は失敗すると恥になるから撃つなと止める。運用及び砲術方先任将校佐々倉桐太郎は「失敗などするものか、答砲すべきだ。失敗するかどうかお互いの首をかけよう。」と言って見事に礼砲を撃ち放った。長崎海軍伝習所では勝と同期生であった佐々倉は「いま勝麟の首を貰ってもよいが、不便だろうから日本まで預けておこう。」といって皆を笑わせた。もうすでに勝の艦長としての威厳は完全に失墜していたといえる。

メーア・アイランド海軍工廠跡。150年前の3月8日、新見正興や小栗忠順ら幕府遣米使節団を乗せたポーハタン号が到着し、咸臨丸修理中の木村喜毅司令官らとお互いの無事と再会を祝した。
（写真撮影、小栗上野介顕彰会理事・東善寺住職村上泰賢氏）

＊礼砲はラウンドナンバーの10発とか20発ではなく、21発とか101発のように端数になっている。これは一説によると、昔英国で王の誕生日に祝砲を100発撃つはずのところ、砲手が緊張のあまり誤って101発発射してしまい王の怒りに触れたが、打ち首を覚悟した砲手は堂々と「今日のよき日を感激いたし、喜びのあまり一発余計に発射いたしました。」と答えた。このウィットに富んだ砲手の答えに喜んだ王は以来端数の礼砲を撃つように命じ、一般化したという。英国シーバス社の超高級スコッチウィスキー「ロイヤルサルート」も、この伝統に倣って端数の21年物となっている。

メーア島海軍工廠にて

ジョン万次郎を除いて初めてアメリカ合衆国に足を踏み入れた咸臨丸乗組員たちは、サンフランシスコの近代的建築物や整然とした美しい街並みに目を見張るばかりであった。

メーア・アイランド海軍工廠跡工場群。小野友五郎はじめ肥田浜五郎ら長崎海軍伝習所で学んだエンジニアたちは工場をつぶさに見学し、帰朝後は小栗が進める日本近代化の一翼を大いに担うことになる。
（写真撮影、小栗上野介顕彰会理事・東善寺住職村上泰賢氏）

咸臨丸は太平洋航海で傷んだところを補修するため、メーア・アイランドの海軍工廠に回航され、無償の修理工事を請けることになった。乗組員らは工廠のヴァレッホ埠頭に走る蒸気機関車を間近に見て驚き、近代化された国の姿に心奪われた。一ヶ月以上に渡る工事の間、小野友五郎や肥田浜五郎をはじめとする多くの士官たちは工廠内施設をつぶさに見学し、自分たち自身が設計する新艦建造が可能だという感触を掴んだ。優れたエンジニアである彼らはメーア・アイランドで得た知識を元に、帰国後小栗忠順（ただまさ）が進める日本近代化の実務の一端を担うことになる。一方海上では散々であった勝は陸に上がったとたん持ち前の社交性を発揮して、サンフランシスコではたちまち人気者になってしまうところはさすがであった。勝の真骨頂はやはり斡旋や交渉などで力を発揮することであろう。

幕府遣米使節団との再会

幕府から派遣された使節団の正使・新見（しんみ）豊前守正興、副使・村垣淡路守範正、監察・小栗豊後守忠順らが乗船したポーハタン号は、三月八日（太陽暦3月29日）サンフランシスコに到着し、木村司令官ら咸臨丸の乗組員と再会してお互いの無事を喜び合った。ポーハタン号は北緯20度を航行してサンドウィッチ諸島（現在のハワイ諸島）に立ち寄り、大王カメハメハ4世に謁見したため、サンフランシスコ到着が咸臨丸より遅れたのであった。

本来ならば木村はここで咸臨丸と分かれ、新見らに合流して使節団の副使としてワシントンＤＣへ向かう予定であったが、咸臨丸を勝に任せることは不可能と判断し、帰路に着く咸臨丸に引き続き乗艦して司令官としての責任を全うした。

司令官木村摂津守喜毅

司令官の木村喜毅は長崎海軍伝習所の提督を務め、今回の渡航は遣米使節団に万一があったときにはその代役を果たす任務を持って咸臨丸に乗り込んだ。木村は艦長の勝より七歳年下の三十歳と年齢は若かったが、思慮深く慎重、かつ統率力もある男であった。代々浜御殿奉行務める旗本の中でも裕福な家柄であったが、太平洋横断という前代未聞の任務にあたり、全財産擲つつもりで臨んだ。渡米に先立ち幕府から支給された公金とは別に家財などを整理して三千両を工面し、なおかつ幕府から個人的に五百両を借り入れ、乗組員たちの士気を高める為に、北太平洋航海中やメーア・アイランドでの修理中にも、ことあるごとに自腹を切って褒賞金を出した。サンフランシスコでブルック海尉と別れる際には、彼の功績に感謝して千両箱を開けて好きなだけ持っていくように提示した。ブルックはこれを断ったが、お互いの友情を誓い合ったという。乗組員の日本への土産品もこの金を使い、日本に帰着した時は全額使い果たすほどだった。木村の人柄や咸臨丸航海に賭ける意気込みや覚悟が伝わってくる逸話である。

咸臨丸司令官（軍艦奉行）、木村摂津守喜毅。若いが思慮深く、しかも統率力があり多くの部下の信頼を得ていた。木村の従者であった福沢諭吉は彼を慕い、一生を通じての付き合いだった。

帰航

メーア・アイランドでの補修工事を終えた咸臨丸は、閏三月十九日（太陽暦5月8日）サンフランシスコを出航する。ここでも慎重な木村はブルックの部下五人を帰路の航海の為に雇うが、好天にも恵まれ咸臨丸は日本人だけの手によって運用され、太平洋を航海した。水野忠徳による長崎海軍伝習所開設で産声を上げた日本の海軍の萌芽は、この帰路の途でヨチヨチ歩きからしっかりとした一歩を踏み出した。木村はその日本海軍創設の功労者の一人といえる。咸臨丸は北緯20度を西航してサンドウィッチ諸島に薪水補給のため寄港し、五月五日浦賀に帰港した。

木村は渡米航海の日記「奉使米利堅紀行」に二人の人物を特筆している。まずブルックに対しては「人物きわめて温良にして航海の術に達せり、この人の行に従うは、予において尤も大幸とする処たり。」と述べて彼と共に航海出来たことを感謝している。そして小野友五郎については「・・・なかんずく、小野友五郎の測量は、かの邦人にも愧じざるわざにして、このたび初めてその比類なきを知れり。」と絶賛する。木村が長崎海軍伝習所の総督に就任するのは二期生からで、最優秀生徒だった友五郎をはじめ一期生は、勝ら留年組を除いて江戸の軍艦操練所の教授方に就任して移動していたので、咸臨丸に乗り込むまで友五郎の力倆を知らなかったようだ。

咸臨丸の筆頭測量方（航海長）小野友五郎。天文方出役であった小野はスワルトの「渡海新編」四巻を解読翻訳して幕府に献本した実績を持つ。長崎海軍伝習所ではライケンから特別に高等代数学や微積分の西洋算術を教授された。小野は天才数学者にして海にも強い理想的な海軍士官であった。

将軍に謁見

木村の帰朝報告書でその活躍ぶりを耳にした将軍家茂（いえもち）から、小野友五郎は謁見の名誉を賜ることになった。友五郎は笠間藩下級藩士の四男で、「御目見得」資格などとは程遠い陪臣という咸臨丸士官の中でも特に低い身分で、陪臣の将軍謁見などかつてない出来事であり、江戸城中の大ニュースとなった。六月一日に将軍謁見が行われ、また年末には航海の功績に対し「時服二、銀五十枚」、航海術への特別賞として「別段金、銀三十枚」といった褒章が授与された。やがて友五郎は徳川家の直参に登用され、異例の出世の途を進んでゆく。

一方、勝麟太郎は海軍の適正無しと判断され、得意のオランダ語を生かすべく蕃書調書頭取助に役替えとなった。面倒見のよい木村の温情による配置転換であろうが、勝には不満であったはずだ。勝は明治三十一年の文倉平次郎への書簡に当時を回想して、帰朝後海軍職を罷免され、二年間海軍との関係を絶たれていたと書き送っている。しかしこのあと勝は自身の才能によって、これまた異例の出世を遂げてゆくのである。

(続く)